

最後に～今後の研究に向けて～

民話を軸に益田川の特徴を考察してきた。時間的制約がある中、十分な資料調査や現地確認ができたわけではなかったが、学校を離れて行う現地取材はその地域の雰囲気や環境を知ることができ、とてもよい経験となった。新たな疑問が湧き、二度、三度と訪れた地域もあった。また、民話だけでなく、民話の周辺に広がる各地域の歴史や地理を考察したことで地域の見方を幅広く学ぶことができた。

また、現在の益田川の姿を見ながら現地取材することで、民話の生まれた時代と現代とを比較体験することができたように思う。今後は、益田川の水害の歴史、あるいは校歌に歌われている益田川およびその支流についての調査研究を進め、多面的に地域河川と河川が作ってきた地域文化を考察したい。

柳田國男の著書『豆の葉と太陽』に以下の記述がある。

「(川は) 即ち天然の最も日本的なるものであった。世界無比などということは大胆で言い切れないが、この限られたる大地の表面に、錯綜して居る流れの数、大小長短と形態のさまざまを、僅かな距離の間に見てあるかれる国というものが、島にも大陸にも他にあることを知らない。是が当然に住民の歴史を、制約し又指導したことは既に説かれて居るが、更に気をつけて見ると、川そのものが、普通の生物以上に栄枯盛衰し、又刻々に流転して居るのであった。」

下呂市の標高差は 2800m 以上もあり、益田川はこの急激な標高差を流れ落ちている。

私たちが知っている益田川の姿はこのうちのほんの一部の、数年間のものでしかなかったが、民話の中には地域河川の歴史や地域社会の姿が隠されていた。少しずつではあるが、民話を通して地域を学び、地域と、地域に生きる私たちの姿を確認していきたいと考える。

本研究をこのような形にまとめることができたのは、取材に協力・指導していただいた地域の方々や校内の先生方のおかげであり、適切な資料を提供していただいた校内外の図書館など社会教育施設のおかげであった。今回の研究をきっかけに地域との連携を進めながら、これからも益田川と向き合い、地域の文化を比較研究していきたい。

【参考資料】

- ・長谷川忠崇. 『飛州志』. 延享年間. (岡本利平編 1909年).
- ・富田礼彦. 『斐太後風土記』. 1873年. (POD版 2002年).
- ・岐阜県益田郡役所. 『岐阜県益田郡誌』. 1916年. (復刻版 1970年).
- ・岡村利平. 『飛驒山川』. 1911年.
- ・中部電力株式会社. 『飛驒川 流域の文化と電力』. 1979年.
- ・高根村史編集委員会. 『高根村史』. 1984年.
- ・朝日村史編纂委員会. 『朝日村史 全』. 1956年.
- ・久々野町史編纂委員会. 『久々野町史 第二巻』. 1985年.
- ・萩原町史編集室. 『萩原町史第一巻・自然先史中世・古代編』. 2002年.
- ・小坂町誌編集委員会. 『岐阜県小坂町誌 全』. 1965年.
- ・下呂町. 『飛驒下呂 通史・民俗』. 1990年.
- ・下呂町史編集委員会. 『飛驒下呂 図録』. 1980年.
- ・金山町誌編纂委員会. 『金山町誌』. 1975年.
- ・長野県松本美須ヶ丘高校文芸クラブ. 『私たちの調べた野麦街道の民話』. 1979年.
- ・鶴野祐介・大橋和華・石川稔子. 『飛驒の民話・唄・遊び ―岐阜県朝日村・高根村の伝承―』. 1999年.
- ・久々野ふるさ文庫刊行会. 『久々野のむかし話』. 1982年.
- ・小坂むかし話編集委員会. 『ひだ小坂のむかし話』. 1980年.
- ・萩原のむかし話編集委員会. 『萩原のむかし話』. 1978年.
- ・金山町のむかしの話・編集委員会. 『金山町のむかしの話』. 1987年.
- ・二村利明. 『飛驒馬瀬村の昔話とうた』. 1981年.
- ・郷土資料編集委員会. 『馬瀬村の古里のはなし』. 2004年.
- ・中部日本新聞. 『伊勢湾台風の全容』. 1960年.
- ・片山洋之介ほか. 『倫理』. 2012年.
- ・柳田國男. 『豆の葉と太陽』(定本柳田國男集第二巻). 1968年.
- ・柳田國男. 『一目小僧その他』(定本柳田國男集第五巻). 1968年.
- ・柳田國男. 『物語と語り物』(定本柳田國男集第七巻). 1968年.
- ・柳田國男. 『桃太郎の誕生』(定本柳田國男集第八巻). 1969年.
- ・岐阜県立益田高等学校創立 80 周年記念誌編集委員会. 『益田高校創立 80 周年記念誌』. 2004年.
- ・益田清風高等学校. 『「地域研究」「社会探究」学習活動のまとめ(2014年4月～2015年3月)』. 2015年.